

SVM と CIELUV 色空間を用いた 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚の色の見え方の 分類

坂井 法仁

令和 2 年 2 月

九州大学理学部物理学科
情報理学コース

目次

| | | |
|-------|-------------------------------|----|
| 第 1 章 | 序論 | 1 |
| 1.1 | 色覚異常について | 1 |
| 1.2 | カラーユニバーサルデザイン, 色覚シミュレーションについて | 3 |
| 1.3 | 本稿の目的 | 3 |
| 第 2 章 | 関連研究 | 5 |
| 第 3 章 | 実験と結果 | 7 |
| 3.1 | データセットの説明 | 7 |
| 3.2 | 実験 1 | 7 |
| 3.2.1 | 手続き | 7 |
| 3.2.2 | 結果 | 10 |
| 3.3 | 実験 2 | 11 |
| 3.3.1 | 手続き | 11 |
| 3.3.2 | 結果 | 14 |
| 第 4 章 | 結論 | 15 |
| 参考文献 | | 16 |

第 1 章 序論

1.1 色覚異常について

世の中には、X 染色体がトリガーとなる先天的な色盲者 [1]，色弱者 [2] や加齢によって色の見え方が後天的に変化する人 [3] がいる。

前者の場合，多くの人は視細胞に L 錐体 (L cone)，M 錐体 (M cone)，S 錐体 (S cone)，杆体 (rod) の 4 種類を持っているが，色盲者は 1 種類以上の錐体細胞 (cone cell) が先天的に欠損していて¹，色弱者は欠損は無いものの刺激の光の波長に対する錐体細胞の感度分布が異なっている。これらを合わせると，国内では男性の約 5%，女性の約 0.2% が色盲者，色弱者である [4, p. 4]。L 錐体が欠損している色盲を 1 型 2 色覚 (protanopia)，M 錐体が欠損している色盲を 2 型 2 色覚 (deutanopia)，S 錐体が欠損している色盲を 3 型 2 色覚 (tritanopia) という²。先天色覚異常の大多数は 1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚である [5, p. 9]。図 1.1.1–1.1.4 は可視光のスペクトル画像とそれに 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚，3 型 2 色覚のシミュレーションを実行した結果である。1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚の色の見え方は似ている。図 1.1.5 は国際照明委員会 (Commission Internationale de l'Éclairage ; CIE) が 2015 年に制定した 2° 視野の CIE2015XYZ 表色系 (CIE2015XYZ color system) から導出される正規化錐体分光感度 (normalized cone fundamental) である。L 錐体と M 錐体の錐体分光感度の分布は近くであり，3 種類の錐体の応答値を 3 次元空間にプロットすることで構成される *LMS* 色空間 (*LMS* color space) は *L* 軸の基底ベクトルと *M* 軸の基底ベクトルが近い向きを向いている斜交座標系になっている。1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚の色の見え方の類似性はここからきいて考えられる。

加齢による色の見え方の変化は核白内障 (nuclear cataract) に伴う水晶体 (crystalline

1 錐体の数は少ないが完全に欠損している訳ではないという人もいて，こちらは軽度であれば色弱に含めることがある。

2 色盲者を表す時は接尾辞が -ia から -e に変化する。E.g. protanope.

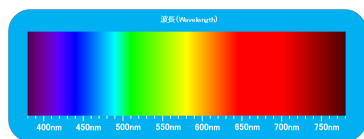


図 1.1.1 可視光のスペクトル画像（波長域：380 nm–780 nm）^a。

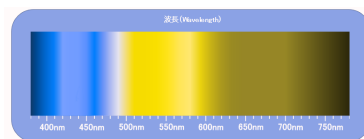


図 1.1.2 図 1.1.1 の 1 型 2 色覚の見え方のシミュレーション^a。

^a 分析・計測・測位用 アート開発 Labs[6] より引用。

^a Colorblind Pro を使用した。以下同様である。

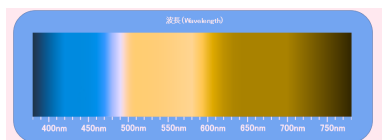


図 1.1.3 図 1.1.1 の 2 型 2 色覚の見え方のシミュレーション。

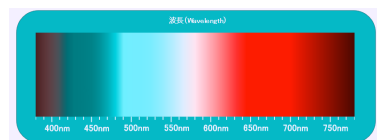


図 1.1.4 図 1.1.1 の 3 型 2 色覚の見え方のシミュレーション。

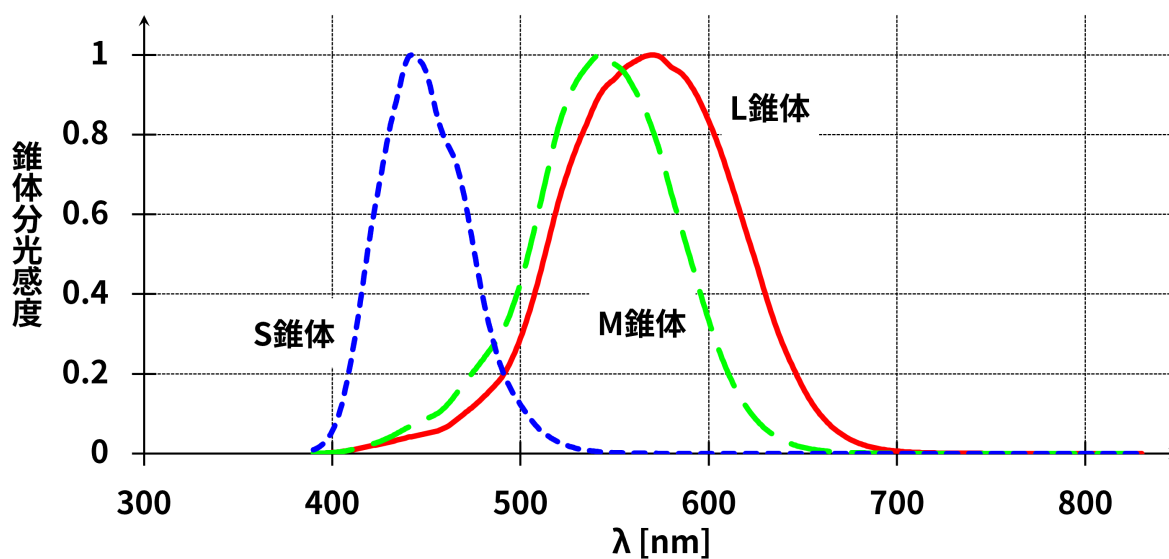


図 1.1.5 CIE2015XYZ 表色系（2° 視野）から導出される正規化錐体分光感度。

lens) の黄変によって光が錐体に届く前にスペクトルが歪められることによって起こる。短波長の光が吸収されやすい為、青紫や青緑等の青系統の色の識別が難しくなる他、液体、炎や電光掲示板が見え辛くなる [7].

1.2 カラーユニバーサルデザイン, 色覚シミュレーションについて

色盲者や色弱者でも識別しやすい色の組み合わせを用いて情報伝達を行うカラーユニバーサルデザインが進められている。多くの色覚異常当事者の協力の下でカラーユニバーサルデザイン配色が考案される ([8, pp. 1091–1099], [9] 等), どんな人でも適切に識別できる組み合わせのチョークが開発される [10], JIS Z 9013 (図記号—安全色及び安全標識—安全色の色度座標の範囲及び測定方法) が改正される [11] 等である。また, Brattel らが 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚, 3 型 2 色覚の色の見え方をシミュレートするアルゴリズムを発表 [12] してからは, 少しずつ改良を加える形で様々なシミュレータが作られ, 3 色覚者でも彼らの見え方を疑似体験できるようになった。

しかし, Brattel らのアルゴリズムを零から実装すると, 前処理として可視光波長域上での数値積分を 3 回, 3 次正方行列の逆行列の計算を 1 回, 3 次元ベクトルの外積を 2 回実行し, 更に各色毎に 3 次正方行列と 3 次元ベクトルの乗算を 3 回ずつ行わなければならない, 24 bit の RGB 色空間で 2^{24} 色³全てに亘って変換を掛けながら当事者と見え方を摺り合わせていくのは大変な時間を要する。その上, 実装や改良に際して色彩学や生理学に関する必要な知識が多く, 専門外の人が取り組みにくくなっていると言わざるを得ない。

1.3 本稿の目的

そこで本稿では, 人口が比較的多く, 色の見え方が類似している 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚に着目する。本学芸術工学研究院デザイン人間科学部門の須長正治准教授が研究されている natural color system (NCS) に関する色のデータセット⁴を用いて, NCS の AdobeRGB⁵座標,

3 $2^{24} = 16,777,216$.

4 本来は 1950 色であるが, 手元に届いた時点で S2075-Y60R と S3050-R20B が同梱されていなかったという。従って, 以下で「NCS」と言う時はこれらを除いた 1948 色を指す。

5 1998 年考案。

サポートベクトルマシン (support vector machine ; SVM), Gauß 過程 (Gaussian process ; GP) による Bayes 最適化 (Bayesian optimization) で NCS の色を 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚それぞれの色の見え方に分類できることを示す. 更に, それで得たパラメータと 1948 色の NCS 全体を用いて, AdobeRGB 色空間上の非負格子点 (2^{24} 色) 全てにおける各 2 色覚での色の見え方を予測する. 各非負格子点の正解ラベルが未知であることを踏まえ, 色差 (color difference)⁶が定義されている均等色空間 (uniform color space) の一つ, CIE1976 $L^*u^*v^*$ 色空間 (CIELUV 色空間) [13, p. 64] に座標変換して予測ラベルの代表色との色差による精度評価も行う.

6 2つの色の区別しやすさに関する定量的指標.

第 2 章 関連研究

Huang らは Brattel らのアルゴリズムを基に、画像から 1 型 2 色覚者、2 型 2 色覚者でも識別しやすい色の組み合わせを導出して色変換する計算手法を提案している [14]. 大まかな考え方は「変換の自然さ」を維持しながら色差を保つ色変換を最適化で見つけることである. 「変換の自然さ」を維持する為に、(1) 変換前後で輝度 (luminance) を変えない、(2) 変換前で同じ色相 (hue) を持つ 2 色は変換後も同じ色相を持つ、(3) 変換前で同じ彩度 (saturation) を持つ 2 色は変換後も同じ彩度を持つように、CIE1976 $L^*a^*b^*$ 色空間 (CIELAB 色空間) 上の a^*b^* 平面を回転する. その回転角は、変換前の色差と合成変換 (Brattel o Huang) 後の色差の差の平方和と変換前後での色差の平方和の非負定数倍を足し、これを誤差関数として最小化することで導出する. 赤色の花や草木が写った写真に対して手法を適用した結果、変換前を 2 色覚者が見たら全体的にくすんだ黄色に見えていたが、変換後は花がマゼンタ色に変化し、2 色覚者には青紫色に見えるようになり、花と草木を識別できるようになった. 当研究は写真や既成のポスター等の掲示物について元々の印象をあまり損なわずに 1 型 2 色覚、2 型 2 色覚への対応が為されるようにリデザインする際には有効であると考えられ、カラーユニバーサルデザインを推進する上で役立つと言える. しかし、実際には多少色が変わる為、現実を色で描写する際に 3 色覚者に誤解を招く可能性がある. また、誤差関数の第 2 項の定数係数はハイパーパラメータであり、この設定によって特に 3 色覚での色の見え方が大きく変化し得ることから、実用時は 3 色覚者、2 色覚者（もしくは色覚シミュレータ）が共同で出力を見ながらパラメータを微調整する必要性が生じてしまう. 本稿では、光源の設定という最小限の仮定から SVM + Bayes 最適化と CIELUV 色空間上の色差の代数計算、解析計算のみで色を分類する為、一度分類作業が完了すれば使い回しが可能で、零から掲示物をデザインする時にも使える.

Funt・Zhu は 2 型 2 色覚の色の見え方を Brattel らのアルゴリズムに依存しない形で計算する手法を検討している [15]. 24 bit sRGB の画像を CIE1931XYZ 表色系に座標変換し、Hunt-Pointer-Estévez (HPE) 変換行列で LMS 色空間に変換する. 更に $M = 0$ で M 錐体の応答を無くして逆変換で sRGB 画像に戻す. 以上の変換前後の対を畳み込みニューラルネッ

トワーク (convolutional neural network) の教師データにする．複数の写真に適用した結果，変換前後で大きな変化が無く，赤色や緑色も残ってしまった．2 型 2 色覚が単純な $M = 0$ 平面上での見え方をしていないという結論が得られている．本稿の 2 色覚変換には Brattel らのアルゴリズムを採用していて，CIELUV 色空間上の色差で分類精度の評価を行っている為，本来見えない筈の色が見える現象に翻弄されにくくなっている．

第3章 実験と結果

3.1 データセットの説明

本稿で使用するデータセットは NCS 1948 色の AdobeRGB 座標（整数値への四捨五入前，但し，計算値が負になった物は 0 にしてある），及び，1 型 2 色覚，2 型 2 色覚それぞれについて各色を 43 クラスでラベリングした結果である．データセットの概要を表 3.1.1，表 3.1.2 に示す．以降，列名に表れる「P」は 1 型 2 色覚，「D」は 2 型 2 色覚のことを意味するものとする．NCS はいずれも物体色である為，光源色である AdobeRGB 色空間への座標変換の前提として光源と XYZ 表色系の仮定が要求される．本データセットでは，光源に CIE 標準光源 D65（CIE standard illuminant D65）を，XYZ 表色系に CIE1931XYZ 表色系（2° 視野）[16, pp. 28–30] を採用している．城戸らの研究（[17, 図 1]，[18, 図 1]）に倣って各代表色を黄青—明度平面に置くと図 3.1.1 のようになる⁷．周囲の数字は Munsell 表色系上の 5Y-5PB 平面における彩度（Munsell 表色系では chroma という），明度（lightness, Munsell 表色系では value という）に対応する．

3.2 実験 1

3.2.1 手続き

実験 1 では，本データセットを 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚の色の見え方クラスにそれぞれ分類する分類器を作成する．乱数シードを基にデータセットを 80/20 に分割する．その上で，訓練データに対して SVM の分類器を導入する．カーネルは radial basis function kernel で固定

⁷ 本来のクラス数は 44 であるが，y-Bk に属する色が NCS に無かったので，表 3.1.1，表 3.1.2 ではそれを無視し，図 3.1.1 ではそれを #000000 で塗っている．

表 3.1.1 データセットの概要.

| | NCS 代表色 | Adobe <i>R</i> | Adobe <i>G</i> | Adobe <i>B</i> | #P | #D | # ($P \cap D$) |
|--------|------------|----------------|----------------|----------------|-----|-----|------------------|
| Wt | S0500-N | 235.6629 | 234.7774 | 231.2127 | 23 | 20 | 12 |
| plGy | S2000-N | 195.6736 | 194.7891 | 191.3287 | 40 | 36 | 20 |
| ltGy | S3500-N | 163.9940 | 162.9809 | 160.8466 | 65 | 58 | 31 |
| mdGy | S5000-N | 134.1809 | 134.1703 | 134.2813 | 70 | 61 | 32 |
| dkGy | S7500-N | 86.9541 | 86.8106 | 86.6477 | 70 | 65 | 28 |
| Bk | S9000-N | 47.2956 | 47.8310 | 49.5712 | 13 | 11 | 9 |
| y-Wt | S0507-Y | 239.5724 | 235.2736 | 209.1030 | 74 | 70 | 63 |
| y-plGy | S2005-Y | 197.0129 | 194.0007 | 177.4013 | 94 | 102 | 75 |
| y-ltGy | S2502-Y | 184.4848 | 183.2185 | 174.1260 | 77 | 73 | 44 |
| y-mdGy | S5010-G90Y | 133.8320 | 129.6478 | 109.4358 | 91 | 74 | 41 |
| y-dkGy | S8010-G90Y | 72.0204 | 68.0469 | 54.3256 | 75 | 58 | 31 |
| vp-Y | S1020-Y | 225.2654 | 214.4556 | 163.4146 | 64 | 62 | 53 |
| lg-Y | S2020-Y | 196.4906 | 186.1061 | 141.9709 | 76 | 85 | 54 |
| mg-Y | S4020-Y | 150.4791 | 138.6121 | 101.8951 | 103 | 104 | 55 |
| dg-Y | S6020-Y | 111.1297 | 99.3336 | 69.0294 | 80 | 82 | 39 |
| vd-Y | S7020-G90Y | 82.5625 | 75.5720 | 51.5917 | 17 | 13 | 5 |
| pl-Y | S0540-Y | 243.6672 | 225.0307 | 135.9848 | 31 | 29 | 23 |
| sf-Y | S2040-Y | 198.0241 | 178.9121 | 103.2851 | 73 | 78 | 46 |
| dl-Y | S3560-Y | 150.4791 | 138.6121 | 101.8951 | 126 | 143 | 83 |
| dk-Y | S5040-Y | 122.8045 | 104.0727 | 52.9174 | 52 | 51 | 25 |
| lt-Y | S0560-Y | 238.1361 | 209.5451 | 87.7278 | 26 | 23 | 20 |
| st-Y | S1080-Y | 214.4635 | 182.5300 | 0.0000 | 47 | 53 | 32 |
| dp-Y | S2070-Y | 185.2438 | 157.4583 | 42.1169 | 30 | 39 | 15 |
| vv-Y | S0580-Y | 238.6570 | 204.8486 | 0.0000 | 1 | 3 | 1 |
| b-Wt | S0505-R90B | 224.6986 | 229.3882 | 233.0692 | 24 | 21 | 16 |
| b-plGy | S0907-R90B | 211.9650 | 218.4358 | 224.1348 | 45 | 46 | 23 |
| b-ltGy | S3005-R80B | 164.4555 | 168.6782 | 174.3469 | 34 | 35 | 12 |
| b-mdGy | S6005-R80B | 103.6745 | 107.1785 | 114.0519 | 44 | 52 | 15 |
| b-dkGy | S7010-R90B | 73.8830 | 81.1664 | 91.7979 | 31 | 35 | 9 |

表 3.1.2 データセットの概要 続き.

| | NCS 代表色 | Adobe <i>R</i> | Adobe <i>G</i> | Adobe <i>B</i> | #P | #D | # ($P \cap D$) |
|-------|------------|----------------|----------------|----------------|------|------|------------------|
| b-Bk | S8010-R50B | 57.8759 | 50.8047 | 62.8086 | 3 | 1 | 1 |
| vp-pB | S0515-R90B | 204.6848 | 217.5930 | 230.3978 | 25 | 29 | 18 |
| lg-pB | S1515-R90B | 179.8229 | 192.8497 | 206.1419 | 38 | 36 | 16 |
| mg-pB | S4010-R90B | 132.2837 | 140.6962 | 150.5120 | 35 | 37 | 12 |
| dg-pB | S5020-B | 93.2631 | 110.9807 | 127.1168 | 29 | 34 | 10 |
| vd-pB | S8010-R90B | 47.3202 | 54.5546 | 66.1253 | 12 | 9 | 5 |
| pl-pB | S0530-R90B | 174.2376 | 200.7052 | 226.8996 | 21 | 24 | 17 |
| sf-pB | S2030-R90B | 140.7151 | 164.1106 | 190.6701 | 36 | 40 | 18 |
| dl-pB | S4030-R90B | 100.1698 | 120.9944 | 149.8754 | 60 | 67 | 40 |
| dk-pB | S6030-R90B | 50.6591 | 70.7194 | 97.8596 | 17 | 16 | 8 |
| lt-pB | S1050-R90B | 122.1359 | 165.7693 | 217.2947 | 20 | 19 | 15 |
| st-pB | S4040-R90B | 78.4195 | 105.1236 | 145.6135 | 16 | 15 | 6 |
| dp-pB | S4550-R90B | 25.5495 | 68.4164 | 115.8239 | 28 | 24 | 21 |
| vv-pB | S3060-R90B | 48.3133 | 96.8561 | 157.3008 | 12 | 15 | 8 |
| 合計 | | | | | 1948 | 1948 | 1107 |

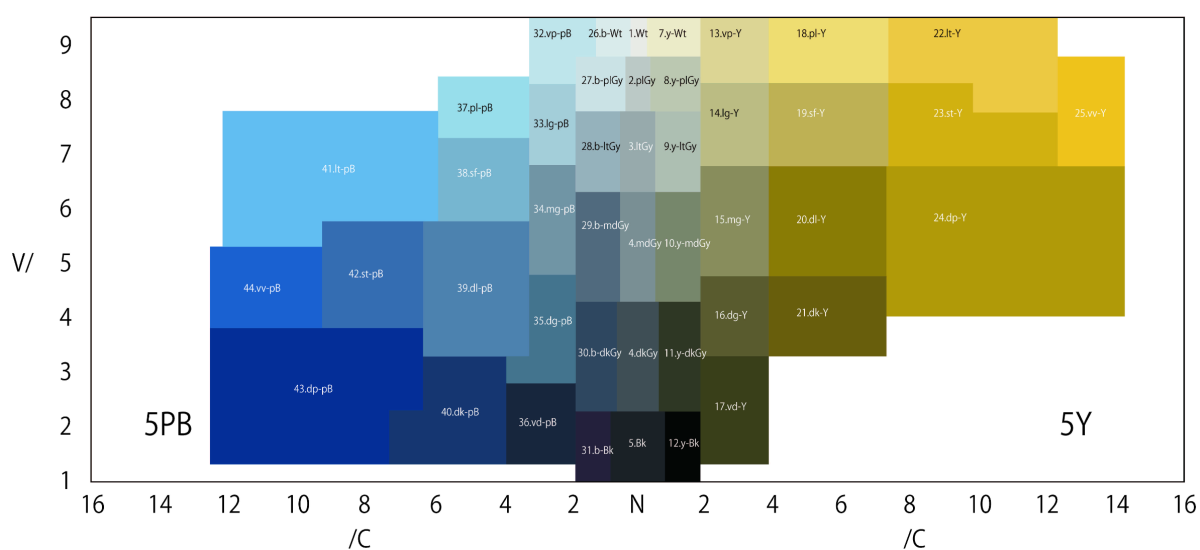


図 3.1.1 黄青一明度平面.

表 3.2.1 実験 1 の結果の数値表.

| | P | D |
|---------------------|-------------------------|-------------------------|
| γ | 1.0830×10^{-6} | 2.7812×10^{-6} |
| C | 1.0486×10^6 | 1.0412×10^6 |
| <i>class_weight</i> | <i>None</i> | “balanced” |
| 正解率（訓練データ） | 0.9936 | 0.9929 |
| 正解率（テストデータ） | 0.9077 | 0.9154 |

し, `sklearn.svm.SVC` のハイパーパラメータ γ , C , *class_weight* を学習する⁸. ハイパーパラメータの推定に GP による Bayes 最適化を用いる. 同じ乱数シードで訓練データを更に 5 分割し,

$$\gamma \in [2^{-20}, 2^{20}] \quad (\text{但し, 対数一様分布 (log-uniform distribution)}), \quad (3.2.1)$$

$$C \in [2^{-20}, 2^{20}] \quad (\text{但し, 対数一様分布}), \quad (3.2.2)$$

$$\textit{class_weight} \in \{\textit{None}, \text{“balanced”}\} \quad (3.2.3)$$

という条件の下, 分割された訓練データそれぞれの正解率 (accuracy) の平均値を最大にするパラメータを推定する. チューニングに用いる `skopt.gp_minimize` のパラメータについては *acq_func* = “EI”, *n_calls* = 200 で設定する⁹.

3.2.2 結果

分割の乱数シードは 88058390 である. 実験 1 の結果を表 3.2.1 に纏めた.

2 型 2 色覚は式 (3.2.1)–(3.2.3) 右辺内部で収束している. しかし, 1 型 2 色覚は $C = 1.0486 \times 10^6 \gtrsim 2^{20}$ より式 (3.2.2) 右辺の上限に一致してしまっている. 正解率から推測するに, 1 型 2 色覚の最適な C は 2^{20} よりもやや大きいと考えられる.

テストデータにおける混同行列 (confusion matrix) を図 3.2.1–3.2.4 に示す. 上段は各々の絶対数, 下段は正解クラス別に割合を取った物である. 図 3.2.3, 図 3.2.4 で対角成分から左または右に 4 列離れた成分が灰明るく光っている様子が見られる. これは, 図 3.1.1 で明度が等しく彩度方向で隣接しているクラス同士の関係であり, AdobeRGB 色空間と Munsell 表色

⁸ これ以外のパラメータは scikit-learn 0.22.1 の `sklearn.svm.SVC` の初期設定のままである.

⁹ これ以外のパラメータは scikit-optimize 0.5.2 の `skopt.gp_minimize` の初期設定のままである.

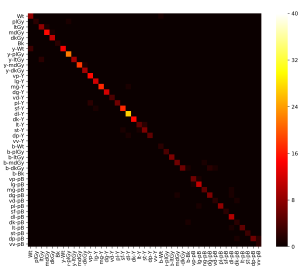


図 3.2.1 1 型 2 色覚の混同行列.

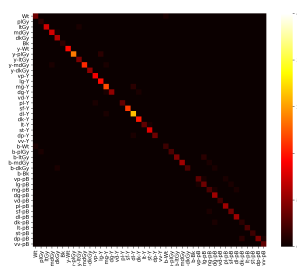


図 3.2.2 2 型 2 色覚の混同行列.

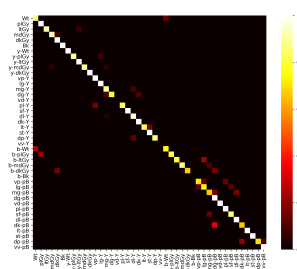
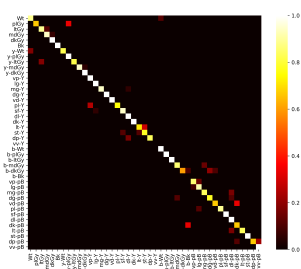


図 3.2.3 図 3.2.1 の正解クラス別割合. 図 3.2.4 図 3.2.2 の正解クラス別割合.

系という異なる空間ではあるものの、この関係にあるクラスが近くにあった為、誤分類が生じたと考えられる。

訓練データでの正解率と混同行列を踏まえると、1 型 2 色覚、2 型 2 色覚のいずれも SVM + Bayes 最適化で十分学習できたと言えるであろう。

3.3 実験 2

3.3.1 手続き

実験 2 では、1948 色のデータセット全てと実験 1 で得たパラメータを用いて、24 bit AdobeRGB 色空間上の非負格子点 (2^{24} 色) 全てにおける 1 型 2 色覚、2 型 2 色覚での色の見え方を予測する。各色は正解ラベルを 2 つずつ持っているはずであるが我々には未知であり、予測の精度を検証できない。しかし、実験 1 の結果から 1 型 2 色覚、2 型 2 色覚いずれにおいても 1 割程度の誤分類が発生することは予想できる。そこで、均等色空間の一つである CIELUV 色空間に座標変換して議論する。均等色空間は CIELUV や CIELAB の他に CIEDE2000 や CAM02-UCS 等様々ある [13] が、CIELUV は変換が比較的単純である為、計

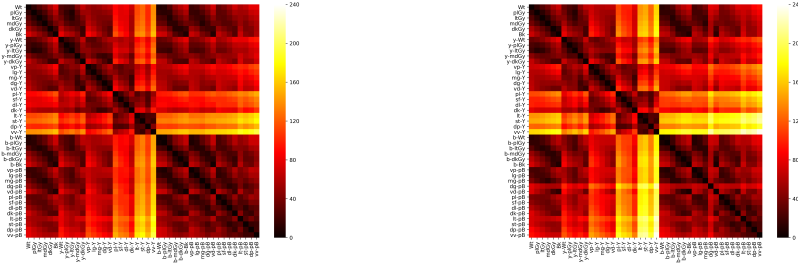


図 3.3.1 1 型 2 色覚における代表色の距離行列. 図 3.3.2 2 型 2 色覚における代表色の距離行列.

算速度が求められる際には役立つ色空間である．一方で，CIELUV や CIELAB は新しい均等色空間と比べて知覚の均一性が弱いという欠点がある [19, p. 10].

まず，表 3.1.1, 表 3.1.2 の各代表色を，CIE1931XYZ 表色系¹⁰，*LMS* 色空間¹¹を経由して 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚の *LMS* に写し，再度 CIE1931XYZ を経由して CIELUV に座標変換する．任意の 2 色 c_α, c_β 間の色差 $\Delta E^{L^*u^*v^*}(c_\alpha, c_\beta)$ は CIELUV 上の Euclid 距離で

$$\Delta E^{L^*u^*v^*}(c_\alpha, c_\beta) = \left\| c_\beta^{L^*u^*v^*} - c_\alpha^{L^*u^*v^*} \right\|_2$$

と表現できる．これを用いて，43 色における距離行列を計算すると図 3.3.1, 図 3.3.2 を得る．Munsell 表色系（図 3.1.1）で近い位置関係にあった対は CIELUV 色空間上でも比較的近くにあることが分かる．

次に，各クラス $(C_i)_{i=1}^{43}$ について代表色を $\hat{c}_i \in C_i$ とし，自分自身を除いて最も近い代表色 $\hat{c}_{\tilde{j}(i)}$ との色差 $\Delta E_i^{L^*u^*v^*}$ を距離行列から

$$\tilde{j}(i) \in \arg \min_{j \neq i} \Delta E^{L^*u^*v^*}(\hat{c}_i, \hat{c}_j),$$

$$\Delta E_i = \Delta E^{L^*u^*v^*}(\hat{c}_i, \hat{c}_{\tilde{j}(i)})$$

で求め，代表色 $\hat{c}_i^{L^*u^*v^*}$ を中心とする半径が ΔE_i である開球 $B(\hat{c}_i^{L^*u^*v^*}, \Delta E_i)$ と，半径がその半分である開球 $B(\hat{c}_i^{L^*u^*v^*}, \Delta E_i/2)$ を考える．以下，便宜的に前者を弱採択域，後者を強採択域と呼ぶ（図 3.3.3, 図 3.3.4 参照）．24 bit AdobeRGB 色空間上の各色について実験 1 で得た SVM で 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚についてのラベルを予測し，代表色に対して行ったのと同様に各 2 色覚への写像と座標変換で 2 色覚の CIELUV 座標を求め，その予測ラベルの代

10 変換 24bit AdobeRGB \rightarrow CIE1931XYZ は Adobe® のマニュアル [20] を参考にした．

11 CIE 標準光源 D65 下での HPE 変換行列を使用した．

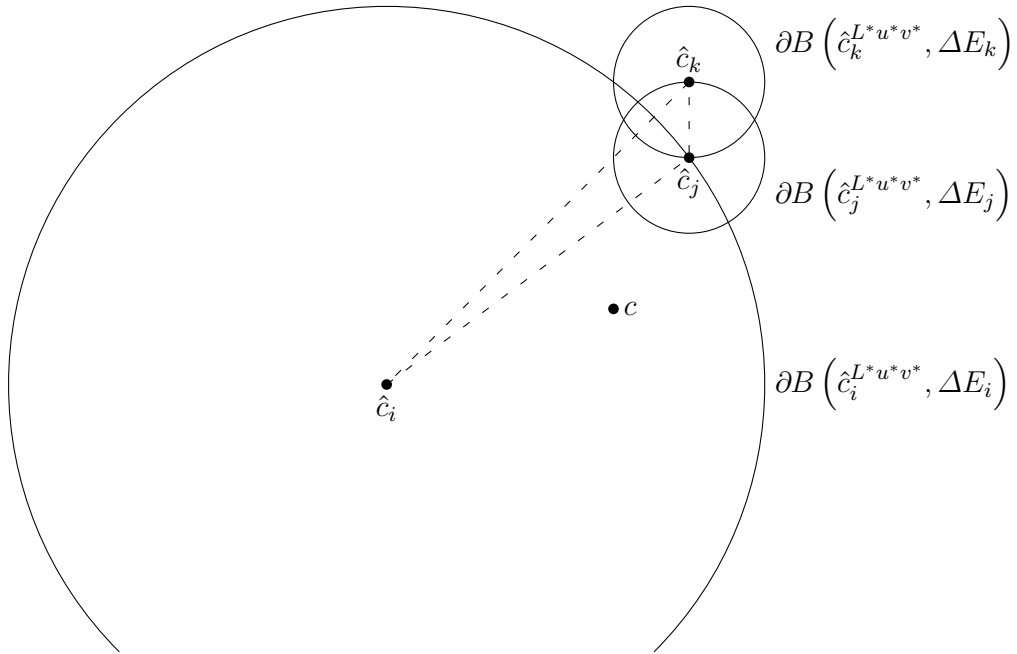


図 3.3.3 弱採択域のイメージ.

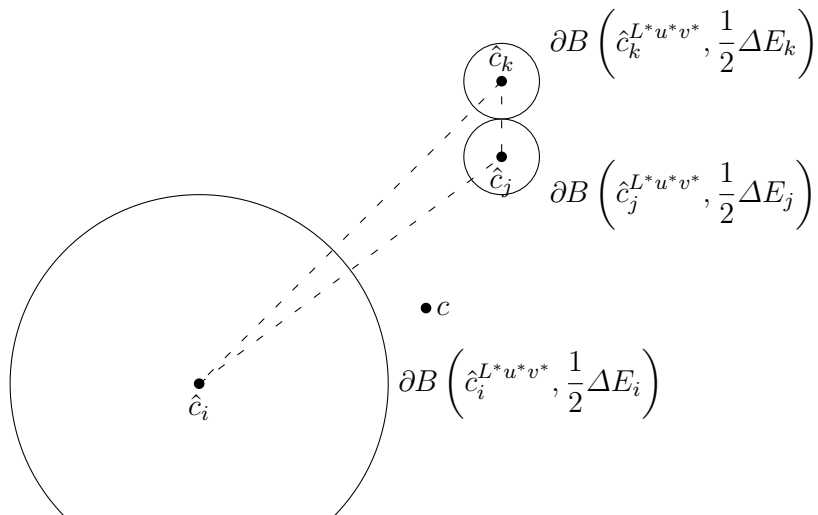


図 3.3.4 強採択域のイメージ.

表色の弱／強採択域に属していれば弱／強採択されるとする（図 3.3.3, 図 3.3.4 の色 c の予測ラベルが C_i であるとする）, c は弱採択されるが強採択されない).

3.3.2 結果

第 4 章 結論

参考文献

- [1] 岡部正隆, 伊藤啓「色覚の多様性と色覚バリアフリーなプレゼンテーション (全3回) 第1回色覚の原理と色盲のメカニズム」, 『細胞工学』, 第21巻, 第7号, pp. 733–745, 2002.
- [2] 須長正治, 桂重仁, 光安祥代「S錐体刺激値差を手掛かりとした3色覚と強度異常3色覚の視覚探索能の比較」, 『日本色彩学会誌』, 第41巻, 第4号, pp. 154–160, 2017, doi: http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.4_154.
- [3] 栗木一郎, 石井渉, 内川恵二「加齢による水晶体黄変が色覚におよぼす効果」, 『照明学会誌』, 第84巻, 第2号, pp. 107–116, 2000, doi: http://dx.doi.org/jiej1980.84.2_107.
- [4] 神奈川県医師会「色覚異常について」, 2019. アクセス日: 2020年1月19日. [オンライン]. 利用可能: <http://www.kanagawa.med.or.jp/ibukai/gakkoui/shikikakuijounitsuite201901.pdf>.
- [5] 京都府眼科学校医会「先天色覚異常と色覚バリアフリー」, 2014. アクセス日: 2020年1月19日. [オンライン]. 利用可能: <http://kyogan.org/sikikaku/colorl-h2606.pdf>.
- [6] Labs 分析・計測・測位用 アート開発「波長と色の関係 | 分析・計測・即位用アート開発 Labs | RTK モジュール・FPGA 基板の通販サイト」, 2019. アクセス日: 2020年1月19日. [オンライン]. 利用可能: <https://www.fiber-light-source-labs.com/tech/198/>.
- [7] 石原恵子, 長町三生, 大崎紘一, 石原茂和, 辻昭雄「加齢に伴う水晶体黄変化による日常生活への影響」, 『人間工学』, 第34巻, 第1号, pp. 9–16, 1998, doi: <http://dx.doi.org/10.5100/jje.34.9>.
- [8] 岡部正隆, 伊藤啓「色覚の多様性と色覚バリアフリーなプレゼンテーション (全3回) 第3回すべての人に見やすくするためには, どのように配慮すればよいか」, 『細胞工学』, 第21巻, 第9号, pp. 1080–1104, 2002.
- [9] カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット制作委員会『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットガイドブック』, 第2版. 大平印刷: 東京, 2018.
- [10] 日本理化学工業株式会社「ダストレス eye チョーク / 日本理化学工業株式会社」, 2020. アクセス日: 2020年1月19日. [オンライン]. 利用可能: <https://www.rikagaku.co.jp/items/eyechalk.php>.

- [11] 中野豊「JIS・ISO・IECの動向——改正 JIS Z 9101・JIS Z 9103の概要及び解説」, 『セイフティダイジェスト』, 第64巻, 第6号, pp. 14–20, 2018.
- [12] H. Brettel, F. Viénot, and J. D. Mollon, “Computerized simulation of color appearance for dichromats,” *J. Opt. Soc. Am. A*, vol. 14, no. 10, pp. 2647–2655, 1997, doi: <http://dx.doi.org/10.1364/josaa.14.002647>.
- [13] 矢口博久「新連載：色彩企画のこれから——CIEの最新動向から(2)色差式の発展」, 『日本色彩学会誌』, 第41巻, 第2号, pp. 62–69, 2017.
- [14] J.-B. Huang, Y.-C. Tseng, S.-I. Wu, and S.-J. Wang, “Information preserving color transformation for protanopia and deuteranopia,” *IEEE Signal Process. Lett.*, vol. 14, no. 10, pp. 711–714, 2007, doi: <http://dx.doi.org/10.1109/LSP.2007.898333>.
- [15] B. Funt and L. Zhu, “Colorization of dichromatic images,” *Int. Colour Assoc. Conf.*, pp. 1–6, 2018.
- [16] 矢口博久「新連載：色彩企画のこれから——CIEの最新動向から(1)CIE表色系の基本」, 『日本色彩学会誌』, 第41巻, 第1号, pp. 22–30, 2017.
- [17] 城戸今日子, 桂重仁, 佐藤雅之, 須長正治「黄青一明度平面における2色覚の色カテゴリ」, 『日本色彩学会誌』, 第41巻, 第6号, pp. 76–79, 2017, doi: http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.6__76.
- [18] 城戸今日子, 桂重仁, 須長正治「2色覚の混同色の黄青-明度平面への色カテゴリマッピング」, 『日本色彩学会誌』, 第42巻, 第3号, pp. 158–160, 2018, doi: http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.42.3__158.
- [19] A. R. Robertson, “The CIE 1976 color-difference formulae,” *Color Res. Appl.*, vol. 2, no. 1, pp. 7–11, 1977, doi: <http://dx.doi.org/10.1002/j.1520-6378.1977.tb00104.x>.
- [20] Adobe, “Adobe® RGB (1998) color image encoding,” 2005. Accessed: Jan. 19, 2020. [Online]. Available: <https://www.adobe.com/digitalimag/pdfs/AdobeRGB1998.pdf>.